



大阪中之島美術館 「没後50年 高島野十郎展」 開催決定のお知らせ

会期 | 2026年3月25日（水）- 6月21日（日）

大阪中之島美術館（所在地：大阪市北区）は、「没後50年 高島野十郎展」を2026年3月25日（水）- 6月21日（日）の期間、開催いたします。このたび展覧会の詳細情報をご紹介いたします。

開催趣旨

高島野十郎（1890-1975）は、福岡県久留米市出身で主に東京で活動し、晩年千葉県柏市に移り住んだ洋画家で、「蝋燭」や「月」などの主題を、細部までこだわった筆致で描きました。没後50年の節目を機に開催する本展は、これまでに開催してきた高島野十郎展を超える最大規模の回顧展で、大阪では初めての開催となります。

代表作はもちろんのこと、彼の芸術が形成されたルーツを遡り、生涯にわたって自身のよりどころとしてきた仏教的思想を読み解きつつ、青年期や滞欧期の作品など、従来の展覧会では大きく取り上げられることができなかった部分にもスポットを当てます。さらに、野十郎や関係者による書簡や日記、メモ等の資料をもとに、彼がひとりの人間としてどのように生き、周囲とどのような関係を築いて絵かきとしての歩みを進めたかという部分にも注目し、野十郎の人間像にも改めて迫ります。

仏教に深い関心をもっていたことから奈良を訪れることが多く、仏塔の端正かつ堂々たる姿に惹かれたであろう野十郎は、薬師寺や法隆寺を絵の題材としました。本展では野十郎が好んで訪れた奈良にもほど近い大阪の地で、野十郎の絵画世界に思う存分浸っていただけるまたとない機会です。

本展のみどころ

- 1 過去最大規模、初公開作品も含めた約150点を公開！
- 2 大阪初の回顧展！本展を見れば、野十郎に夢中になること間違いない！
- 3 作品における仏教的思想や、素朴な人間像にも迫る



高島野十郎とは？

高島野十郎（たかしま・やじゅうろう／1890（明治23）年 – 1975（昭和50）年）



高島野十郎《絡子をかけたる自画像》
大正9(1920)年 福岡県立美術館

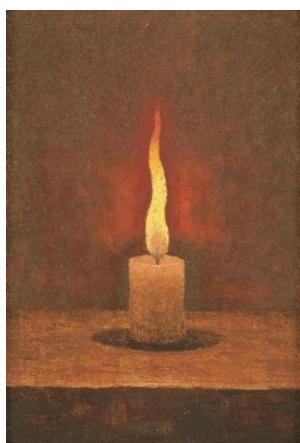
1890（明治23）年、福岡県御井郡合川村（現・久留米市）の裕福な酒造家であった高島家の五男に生まれる。本名は彌壽。福岡県立中学明善校（現・明善高等学校）に学んだ頃から絵に目覚め、長兄の宇朗（詩人）の友人であった青木繁を知る。そのため、旧制第八高等学校（現・名古屋大学）を経て東京帝国大学農学部水産学科を首席で卒業するものの、画家の道を選んだ。以後も独身を貫き、独学で絵を学んで美術団体にも属さないことで、流行や時代の趨勢に流されることがなかった彼の画業は、自らの理想とする絵画を生み出す行為そのものであった。

1980（昭和55）年、福岡県文化会館（現・福岡県立美術館）にて開催された展覧会「近代洋画と福岡県」に《すいれんの池》が出品され、無名の画家であった野十郎の評価が始まった。その後、1986（昭和61）年に初の回顧展となる「写実にかけた孤独の画境 高島野十郎展」が福岡県立美術館で開催されて以降、連続的に展覧会が開催され、その作品や画業の全体像が明らかになってきた。代表作《蠅燭》や《月》をはじめとする作品は、卓越した技量と、緊張感さえもみなぎる独特の写実的筆致を魅力とする。

展示構成

■ プロローグ 野十郎とは誰か

高島野十郎の画業が世に初めて知られたのは、彼の死後約10年を経た昭和61(1986)年。以来、いくつかの展覧会や書籍で紹介されてきたものの、多くの人の目に触れてきたわけではありません。まず始めに、盛んに描いた《蠅燭》や《月》のほか、自画像や静物画、風景画など、代表作品とともに彼の画業の全体像を紹介しましょう。



高島野十郎《蠅燭》
大正時代(1912-26) 福岡県立美術館



高島野十郎《月》
昭和37(1962)年 福岡県立美術館



高島野十郎《からすうり》
昭和10(1935)年 福岡県立美術館



■ 第1章 時代とともに

野十郎は画業の初期に小さな絵画グループ「黒牛会」で3年間活動するも美術団体に属することなく、個展で作品を発表していました。

しかし同時代の美術の流れから断絶していたわけではありません。明治末頃に多くの若い日本作家たちの心を惹きつけたフィンセント・ファン・ゴッホ（1853-90）に彼も大きな影響を受けています。そして草土社を結成した岸田劉生（1891-1929）たちが大正期に展開した細密な写実描写は、その静謐で深い精神性をたたえた表現によって野十郎に強い感化をもたらし、彼の画業の方向性を決定づけています。また青木繁（1882-1911）や坂本繁二郎（1882-1969）、古賀春江（1895-1933）など同郷の画家たちとの出会いや交流も彼の画業形成に少なからず寄与しています。

野十郎が写実の画風を確立させていく道程を、同時代の美術の中で捉え、「孤高の画家」と呼ばれることがある野十郎も、日本の近代美術史を彩る画家のひとりであることを紹介します。



岸田劉生《静物 (湯呑と茶碗と林檎三つ)》
大正6(1917)年 大阪中之島美術館



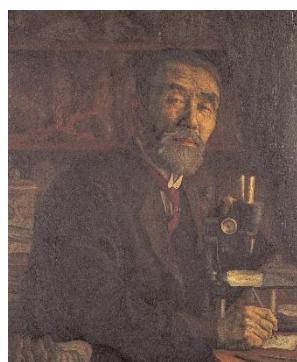
高島野十郎《田園太陽》
昭和31(1956)年 個人蔵

■ 第2章 人とともに

野十郎と40年近く交流のあった日本芸術院会員の洋画家・大内田 茂士（おおうちだ しげし, 1913-94）は野十郎についてこう書いています。「人間ぐらいは相変わらずで、結婚もせずこのアトリエに一人住み、晴れれば畠で働き、降れば絵を描くという毎日であった」。

しかし野十郎は人を遠ざけていたわけではありません。彼は魅力ある人物であったようで、彼の絵を愛し、素朴で気骨ある生き方に共感する人たちが数多くいました。この人たちが、画壇では無名の彼の絵を大切に守り、そして一人暮らしに不思の多い生活ぶりや考え方などを伝えてくれています。野十郎は「孤高の画家」であったかもしれません、「孤独の人」ではなかったことを示しています。

本章では、野十郎に魅せられた人々が守ってきた作品とともに、彼らの眼が捉えた野十郎の生身の姿を紹介します。



高島野十郎《岸上鎌吉先生像》大正10年代頃
東京大学大学院農学生命科学研究科水圈生物科学専攻



高島野十郎《筑後川遠望》
昭和24(1949)年頃 福岡県立美術館

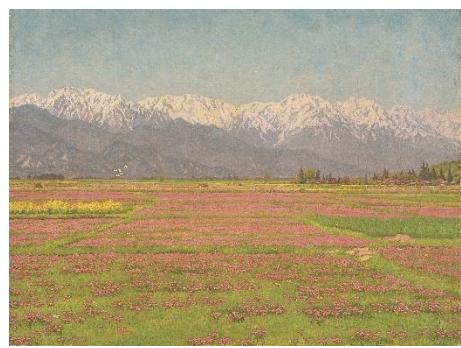


■ 第3章 風とともに

本章ではヨーロッパ留学中や日本全国を旅した際に描いた四季の風景画作品に注目します。旅を愛した野十郎は、独り身の気楽さもあってか、ひとり気ままに旅に出ては、気に入った場所に長期間滞在していました。旅先で見つけた美しい景色をじっと見つめ、歩き回っては立ち止まり、目に見える風景だけでなく、匂いも光も空気までも味わい尽くし、その経験すべてを一枚の絵に凝縮していたようです。そのようにして作り出される野十郎の風景画は、眼前の風景を即興的に写し取ったものではありません。選ぶ対象や構図、いかなる細部もおろそかにしない精緻な描写には、生涯揺らぐことがなかった一貫性を読み取ることもできます。



高島野十郎《イタリヤの海 キオッジア漁村》
昭和5-8(1930-33)年 個人蔵

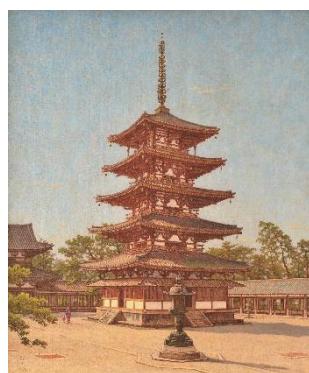


高島野十郎《れんげ草》
昭和32(1957)年 個人蔵

■ 第4章 仏の心とともに

野十郎の長兄で詩人の宇朗（1878生）は禅宗に帰依しており、兄の影響からか、野十郎は青年時代から仏教に深く傾倒していました。空海の真言密教に接近したり、四国や秩父の札所巡りにたびたび出かけたりするなど、仏教へのたゆまぬ関心を持ち続けていました。なにより、対象の写実的な描写を慈悲の実践と捉えていた野十郎にとっては、絵を描くことそのものが仏の教えに接近することでもありました。

本章では、野十郎が生涯よりどころとしていた広義での仏教をはじめ、広く宗教を予感させる作品を紹介します。寺社や地蔵などの直接的な作品だけでなく、一見すると普通の静物画や風景画にも「晴と雨」、「生と死」など相対立するものを表す仏教的な考え方が込められていることを示します。



高島野十郎《法隆寺塔》
昭和33(1958)年 個人蔵



高島野十郎《割れた皿》
昭和23(1948)年以降 福岡県立美術館



■ エピローグ 野十郎とともに

ここまで、野十郎の生きた時代や人となり、芸術観、そしてそこから生み出された作品を様々な切り口から点描してきました。そこで見出されたのは、野十郎が絵描きとして、生涯いかに自らを見失わずに真摯に、そして誠実に絵画制作と対峙したかということでしょう。しかしそれは、決して特別なものではなく、ひとりの人間としての生の営みそのものです。自らの理想と信念にひたすら忠実であろうとしたストイックな彼の生き方は、出口の見えない混迷の時代を生きる私たちにとっても非常に魅力的に映るのではないでしょうか。

本章では、全体を振り返りながら、ふたたび野十郎の代表作品を紹介します。目の前のひとつひとつの作品を細部にいたるまで味わい尽くし、野十郎がそこに込めようとしたものに想像をめぐらせることで、我々もまた野十郎の眼差しや、絵描きとしての在り方を追体験することができるでしょう。



高島野十郎《さくらんぼ》
昭和31(1956)年頃 福岡県立美術館



高島野十郎《睡蓮》
昭和50(1975)年 福岡県立美術館

開催概要

展覧会名 没後50年 高島野十郎展

会期 2026年3月25日（水）- 6月21日（日）

休館日 月曜日

開場時間 10:00 – 17:00（入場は16:30まで）

会場 大阪中之島美術館 4階展示室

主催 大阪中之島美術館、毎日新聞社

協賛 大和ハウス工業

協力 ブルーミング中西

展覧会公式サイト <https://takashimayajuro50.jp/>

美術館公式ホームページ <https://nakka-art.jp/>

お問い合わせ 06-4301-7285 大阪市総合コールセンター（なにわコール）＊受付時間8:00 – 21:00（年中無休）

報道関係者

「没後50年 高島野十郎展」広報事務局（株式会社TMオフィス内）

お問い合わせ先

担当：馬場、永井、西坂 TEL：090-6065-0063（馬場） 090-5667-3041（永井）

テレフォンセンター：050-1807-2919 FAX：06-6231-4440 E-MAIL：takashimayajuro50@tm-office.co.jp



[広報用画像一覧] 没後50年 高島野十郎展

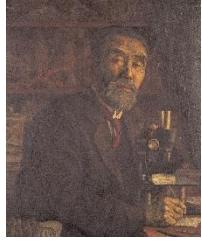
本展の展示物等の画像を、広報素材としてご提供いたします。下記申し込みフォームよりお申し込みください。

[広報用画像申込フォーム]

<https://forms.gle/VbJrsUxuemzMdXSQ7>

*難しい場合は申込書に必要事項をご記入のうえ、広報事務局までご送付ください。

■ 広報画像をご使用の際は、別紙に記載の「画像使用全般に関する注意」を必ずご確認ください。

(1) 	(2) 	(3) 
(4) 	(5) 	(6) 
(7) 	(8) 	(9) 
(10) 	(11) 	(12) 
(13) 	(14) 	



[広報用画像クレジット一覧] 没後50年 高島野十郎展

No.	クレジット・作品名・年代・キャプション
1	高島野十郎《絡子をかけたる自画像》 大正9(1920)年 福岡県立美術館
2	高島野十郎《蠍燭》 大正時代(1912-26) 福岡県立美術館
3	高島野十郎《月》 昭和37(1962)年 福岡県立美術館
4	高島野十郎《からすうり》 昭和10(1935)年 福岡県立美術館
5	岸田劉生《静物(湯呑と茶碗と林檎三つ)》 大正6(1917)年 大阪中之島美術館
6	高島野十郎《田園太陽》 昭和31(1956)年 個人蔵
7	高島野十郎《岸上鎌吉先生像》 大正10年代頃 東京大学大学院農学生命科学研究科水圈生物科学専攻
8	高島野十郎《筑後川遠望》 昭和24(1949)年頃 福岡県立美術館
9	高島野十郎《イタリヤの海 キオッジア漁村》 昭和5-8(1930-33)年 個人蔵
10	高島野十郎《れんげ草》 昭和32(1957)年 個人蔵
11	高島野十郎《法隆寺塔》 昭和33(1958)年 個人蔵
12	高島野十郎《割れた皿》 昭和23(1948)年以降 福岡県立美術館
13	高島野十郎《さくらんぼ》 昭和31(1956)年頃 福岡県立美術館
14	高島野十郎《睡蓮》 昭和50(1975)年 福岡県立美術館



[広報用画像申込書] 没後50年 高島野十郎展

[画像使用全般に関しての注意]

- ・本展広報用画像の使用は、展覧会の紹介を目的とした報道に限らせて頂きます。ご使用可能期間は本展会期終了までです。
- ・ご使用の際は、展覧会名、会期、会場名、所定の作品データ、所定のクレジットを必ずご掲載ください。
- ・画像はすべて全図で使用してください。トリミング、文字や他のイメージを重ねることはできません。
- ・本展終了後の掲載、画像の二次使用はできません。本展会期中であっても再放送や転載をされる場合は広報事務局にご連絡ください。
- ・展覧会基本情報と広報画像の確認のため、校正を本展広報事務局にお送りくださいようお願いいたします。
- ・インターネットでご紹介いただく場合はコピーガードをかけてご使用のうえ掲載URLをお知らせください。
- ・掲載誌・紙（紹介号）、同録DVDほかを下記広報事務局まで1部お送りください。

[広報用画像申込フォーム]

<https://forms.gle/VbJrsUxuemzMdXSQ7>

*難しい場合は申込書に必要事項をご記入のうえ、広報事務局までご送付ください。

ご希望の広報画像／1 · 2 · 3 · 4 · 5 · 6 · 7 · 8 · 9 · 10 · 11 · 12 · 13 · 14																
貴社名／																
お名前／																
部署／							ご所属／									
貴媒体名／							媒体種／									
サイトURL／																
掲載号・露出予定日／				月号（			月		日号）／		月			日発売予定		<input type="checkbox"/> WEBへの転載あり
TEL／							FAX／									
E-MAIL／																
<input type="checkbox"/> チケットプレゼントを希望する（最大2組4名様） *招待券のご提供は、広報用画像1点以上を掲載の上、本展をご紹介いただける場合に限らせていただきます。																
送付先／〒 -																
備考／																